

ユダヤの百合——Bernard Malamud の ユニークな世界

新 美 澄 子

I. ユダヤの百合

1. Malamud の 'the comic vision of life'

1973年に Leslie and Joyce Field との間に交された書簡形式による 'commentary and summary' の中で、Leslie たちは Malamud の人生観（即ち文学観）について次のように質問している。

The Fields: Would you agree that yours is basically a comic vision of life?

Malamud: There is comedy in my vision of life.

To live sanely one must discover—or invent it. Consider the lilies of the field; consider the Jewish lily that toils and spins.¹⁾

引用の英文では toils and spins の目的語は省略されているが、文脈から判断すれば、ユダヤの百合が骨折って紡ぐものは、当然 'a comic vision of life' である。Malamud の 'the comic vision of life' とは何か——それを考察するのがこの論文の第一の目的である。

Malamud の作品にはしばしば奇妙なおかしさがあると言われる。短編集 *The Magic Barrel* の中の秀作 *The Loan* にもユーモアとペースソスの織りなす独特のおかしさがある。この短い作品に Malamud は人生の様々な悲哀や喜びの経験を、青春の淡い期待から中年の辛い苦勞、そしてつましい幸福にすぎない晩年まで、読者の胸にしみこむような実在感をもって描く。人間や人生の持つ崇高さと愚かさをこれほど簡潔に、感動的に表現した作品も少ない。この作品は傑作であるだけでなく、Malamud の言う 'the comic vision of life'

を分析するのにも格好の材料を提供している。

ある日の午後パン屋のリープ (Lieb) の店先に一人の見知らぬ男が訪れる。やせて骨ばった男で、固い帽子に貧しい黒服といういで立ち。リープの妻は男の出現に不吉な予感を抱く。実はリープと同郷のユダヤ人で何十年も前に一緒にアメリカへ移民してきた仲間だった。リープは体中、粉だらけの格好で奥から出てくる。旧友の姿に驚くが、気の良い彼は親切に中へ招き入れる。しかし女房の猜疑心をよそに客はなかなか用件を切り出さない。しだいにリープも女房と同じ不安に駆られるが、それを打ち消すように昔話を始める。移民した当時の苦労の思い出にリープの方が胸を熱くする。やっと口を割った客の用件はやはり金の無心だった。困惑しながらも落ちぶれた友人に同情するリープと女房が対立する。夫婦喧嘩をしかけた二人に、客は、借金は死んだ妻の墓石を買うためであると打ち開ける。彼の気の毒な身の上話に女房もついに折れた、とリープたちが考えた時、妻君は突然、彼女自身の半生を語り出す。彼女もまた辛い思い出と共にロシアからアメリカへ来たのだ。リープと一緒にってから生活は苦労が多かった。おまけにリープは半病人で、今あるわずかの貯えを差し出す訳にはいかないのだ。彼女のお喋りに客はしまいに耳をふさぎ、無心をあきらめて帰りかける。とその時、鼻をくくん言わせた女房はあっと驚いてパンがまの扉を開けた。がすでに遅く、焼き皿の上には黒こげのパンの死骸がずらりと並んでいた。二人の男は抱きあい、深い溜息をついた後、永遠に別れた。

Tears streaming from her eyes, Bessie raised her head and suspiciously sniffed the air. Screeching suddenly, she ran into the rear and with a cry wrenched open the oven door. A cloud of smoke billowed out at her. The loaves in the trays were blackened bricks - charred corpses.

Kobotsky and the baker embraced and sighed over their lost youth. They pressed mouths together and parted forever.²⁾

以上が荒筋だが、涙ながらに悲痛な調子で自分の半生を語っていた妻君が、急いでかまをとり出した時の、驚きと失望の表情を想像して、読者は思わず吹き出すであろう。ここには正に Malamud の 'the comic vision of life' が効果的に浮き彫りにされている。

そこでこの作品のユーモアを分析する前に、まず Malamud のアイロニーに

ついて一言しておきたい。アイロニーの葛藤を和らげているのがユーモアの働きのなのである。

2. Malamud のアイロニー

(1) 動機の対立のアイロニー

The Loan でみたように Malamud の作品には動機の対立というアイロニーがある。「一つの動機にはそれと対立する動機がまつわりついている」³⁾。登場人物の最初の願望はきまって、それを阻むものの出現によって初めの形では実現されない。例えば *The First Seven Years* では靴屋のフェルド (Feld) のささやかな夢は、一人娘を近所の大学生マックス (Max) のような前途有望な青年と結婚させる事なのに、娘は彼より風采の上らぬ中年男の店員ソベル (Sobel) に魅かれている。*The Girl in My Dream* のミトカ (Mitka) の期待も皮肉な形で裏切られる。*The Prison* のトミー (Tommy) の親切心は妻に馬鹿にされ、少女にも痛烈に嘲けられる。*The Magic Barrel* のレオ (Leo) の希望と結婚仲介業者の提供するものはいつも滑稽な食い違いを生じる。同様に *The Last Mohican* にも *Behold the Key* にも *Take Pity* にも Malamud 一流のアイロニーがあちこちに散りばめられている。長編の *The Assistant* ではモリス (Morris) が抱いたアメリカの夢は幻想であり、ヘレン (Helen) が望む教養ある有望な青年ナット (Nat) は俗物と分り、孤独になったヘレンを慕うフランク (Frank) の恋は片思い。このように全てがアイロニカルに展開していく。

(2) 人格の矛盾に見られるアイロニー

アイロニーは動機の葛藤として現われるだけではない。あらゆる事象に相反する性格が同時に存在する。フランクが徐々に魅きつけられるモリスのユダヤ人的誠実さ⁴⁾も、葬式の後の娘の「父は融通が利かない愚直さのために一生を台なしにした」という批評によって反論される。同様に *St. Francis* に憧れるフランクは道徳的向上心の強い人間かと思うと、昔の習慣を絶ち切れずに、店の金をごまかし続ける。また最初強盗として加害者だったフランクは、破産しかけたモリスの店の救済者になり、やがて一家の重荷を負ううちに、いわば被害者になる。

The Last Mohican では加害者と被害者が同一の人間であることが、冒頭のフィデルマン (Fidelman) とサスキンド (Susskind) の出会で暗示されている。

A New Life のレヴィン (Levin) と下宿を共にするシリアの学生サディッ

ク (Sadek) にはこのサスキンドの面影がある。レヴィンと同僚ギリー (Gilly) の関係も、大学改革について正当な主張をしたために疎外されるレヴィンは、陰ではギリーの妻を寝取る加害者である。

つまり Malamud の人物は聖人が愚者となったり、被害者と思っていると加害者でもあったり、二面的な性格を持つ。そういう矛盾した人間の中で最も印象深い人間は、モリスであろう。ユダヤ教の形式的な掟はほとんど破っているくせに、最も純粋な意味で、古風なユダヤ教徒を思わせるモリス⁵⁾。彼の厳肅さと滑稽の入り混った不思議な人柄は、Malamud の描いた人物の中でも白眉である。

(3) ヒロインのアイロニー

Malamud のヒロインたちはアンチ・ヒロインとでも呼ぶべきである。彼女たちには美・醜の両面がある。例えば *A New Life* のポーリン (Pauline) は茎の長い百白のような体で着こなしが上手だが、胸は扁平で、形のいい脚には大きすぎる足がついている。(寝取られた後、ギリーはレヴィンに彼女の生理学的な欠点も暴露している)。

ヘレンは美しい娘として描かれているが、両脚が少しわん曲しており、やはり小さい胸をしている。あらゆる女性的なやさしさにもかかわらず、ヘレンもポーリンもプライドが高く、欲求不満の強い女として描かれている。

The Natural のアイリス (Iris) は少し太り過ぎの大柄な未婚の女性で、驚いたことに三十三才ですでに孫がいる。

彼女たちの役割については後述の 'The Loathly Ladies' の所でふれるが、彼女たちがアンチ・ヒロインである根拠は、その容顔ならびに性格上のアイロニーにある。

Malamud がこのように相反する性質を同一の人物に並存させた理由は、彼が複合的な性格に、人間としてのリアリティーを感じる作家だったからである。とにかく Malamud は単純な相対的概念で人物を規定してしまう、従来のリアリズムに従わなかった。その、互いに矛盾するものを並存させる Malamud 流のアイロニーは、作品の持つ滑稽な感じと無関係ではない。Malamud の独特なユーモアを解明する前に、さらに一步問題をつきつめて、条件の矛盾によって生じる滑稽な感じと、文体そのものが持つユーモアの関係について考えてみたい。

3. 滑稽とユーモアの違い⁶⁾

(1) 滑稽の定義

The Loan で一番おかしく感じるのは、何といっても最後にパンが全部、黒こげになって出てくるシーンであろう。

しかしここで考えなければならないのは、滑稽という感情は、あくまでその状態を客観的に眺める事のできる、読者の側にしか存在しないという点である。そして滑稽の笑いが成立する時は、見る者が見られる者より上位にある場合が多い。つまり読者は、リープたちの苦労や愚かさをつき放して見る、超越的な立場にいるからこそ、読者の心に「話に気を取られて大事なパンを台なしにしてしまうとは、なんて間抜けだろう」という考えが無意識に働らくのだ。つまり滑稽は、見る者が見られる者を、いわば自分と無関係の一つのモノのように、割り切った場合に起るのである。

ところが言うまでもなく、パンを台なしにしたリープたちしてみれば、パンが黒こげになった事実は面白い所か、自分たちの不幸をさらに上塗りするような不快な出来事でしかない。彼らが愚痴や言い争いに夢中になっていた自分たちの愚かさを、少しでも客観的に眺めるという事をしない限り、その時の状況を彼ら自身は、滑稽と感ずる事はできない。

(2) 視点の弁証法

さて作者が一つの状況を表現する場合、二つの視点が考えられる。①は状況を客観的に眺める視点——この場合、作者はいわば神の位置にいる。②は人物の主観に立つ視点である。言うまでもなく①と②の立場は矛盾する。

The Loan の三人を①の客観的な視点から見下ろせば、彼らの陥った状態は愚かしく、滑稽に見える。逆に②の視点から見れば、彼らの境遇は人生の悲哀を読者に感じさせるだろう。

ところでこの作品から読者はパンが黒こげになった滑稽さと同時に、リープたちの人生の哀しみも感じる事ができる。滑稽と悲哀という本来矛盾したものを同時に感じる事ができるのは、実は作者が弁証法的構造を持つ第三の視点に立っているからである。それを図式的に表わせば次のようになる。

- | | |
|--------------|---------|
| ① 客観的立場に立つ視点 | } 第三の視点 |
| ② 主観的立場に立つ視点 | |

作家がある状況の「全体」を捉えようとすれば、①と②の視点を同時に成立させなければならない事は自明である。しかし①と②は矛盾するから、仮に①

の立場に立っていた作者が、そのまま②の人物の主観に入りこもうとすれば、その部分の描写はいまいに陥る。そこで、①と②のいずれの相対的立場をも弁証法的に否定媒介する絶対的な立場を作者は確保せねばならない。それが第三の視点である。この①と②を同時に成立させる第三の場所を Malamud は *The Loan* では保持している。その場所こそ、この作品の独特なユーモアが生まれる場所なのだ。つまり Malamud の奇妙なユーモアは、矛盾した二つの視点が同時に成立する時に生じる奇妙なおかしさである。おかしさは対立する視点の「同時性」から生じているのである。

(3) 第三の視点の可能性

では矛盾する視点が、同時に成立する第三の場所は、どのようにして作られるのか。

第一に Malamud は、*The Loan* の特徴ある三人の人間像を規定する際にどの規定も絶対化していない。コボツキー (Kobotsky) という人間を描くにも一つのイメージで割り切っていない。コボツキーの不運は、それ自体としては悲惨である。にもかかわらず読者はそこに、ある種の滑稽を感じる。リーブの人生についてもそうである。アメリカの夢を追ひ求め、粒々辛苦して、ようやくかすかに幸せの影を掴んだ彼は、今や過労のために眼はソコヒになり、腹には脱腸帯をしている。不運な人間であるのに、作者は不運という規定を絶対化しない。つまり作者は、リーブやコボツキーの苦しみに自己を見失ってはいず、それをつき放す精神の自由を持っている。それでいながら、リーブの古くからの苦勞や悲しみを、かえってリアルに感じさせる事ができる。

リーブの辛さや悲しみは、女房の主張する「家庭の事情」より、むしろ彼のコボツキーに対するやさしさや思いやりの中に、そして彼の感じている訳の分らぬ不安の中に、より強く感じられる。Malamud の繊細な感受性は、細部の描写の中に、人生の苦難と人間性の真実を伝える事に成功している。

コボツキーの愚鈍さや厚かましき、また女房の女らしい狭量と心配などは、それぞれ個別に見れば相対的な事情にすぎない。女房にとって、店の繁栄が絶対的な価値を持とうと、同胞のコボツキーの不運は、彼女の絶対性を否定してしまう。同胞の苦しみを知って、なお自分たちだけの幸せにしがみつこうとする女房の狭量さは、愚かしく醜く見える。しかし、女房やリーブが、練り粉の中に落としたと言う涙の味も、真実である。それらはみな相対的な真実を持っている。そしてさらに、三人を見下す客観的な視点、それも、別の一つの相対的な立場にすぎない。この「客観的な視点の存在」を黒こげのパンは象徴していると言えよう。

以上の様々な相対的な立場が同時にぶつかり合って、奇妙なおかしさが生じている。しかもそれが、アイロニーの滑稽に止まらないで、不思議に調和している。例えば、旧友に同情するリーブの親切心は、しっかり者の女房に阻止される。しかし、そのしっかり者の妻君の賢明ささえ、パンがまっ黒こげになるハプニングで滑稽へと転落する。

読者はこの時の滑稽感に、同時に奇妙なニュアンスがつきまとっている事に気付くであろう。つまり作者は人物をつき放して眺めてはいるのだが、完全につき放している訳ではない。アイロニーの苦さを不思議な親近感をもって和らげている。それが、第三の視点が生むユーモアなのだが、Malamud のユーモアはいわゆる諷刺的な手法とははっきり違う。作者は、つき放していると同時に、人物たちを自分と同じ一人の人間として暖かく受け入れている。つまり人間像の規定を絶対化して割り切らない。先に述べた滑稽とは異なる視点から作者は三人を描いている。

結局、相対的なもの(客観的視点の立場と主観的視点の立場)を絶対化しないで同時に成立させる手法が、ユーモアの方法である。別の表現をすると、リーブたちの心理状態と、かまどの中で、じわじわと黒こげになっていくパンの、両方を一辺に眺めることのできる視点が、ユーモアの視点である。このユーモアは、黒こげのパンを見て驚愕するリーブたちの表情を想像する時に頂点に達する。

しかし実は第三の視点の存在によって、ユーモアは物語の最初の行から始まっているのだ。そしてこの第三の視点こそインタビューで Malamud が答えた、ユダヤの百合が紡ぐ 'the comic vision of life' の本質なのである。

II. Malamud の Jewishness に関する問題点

Malamud はアメリカのユダヤ系作家の中でも最もユダヤ的な作家とされながら、前述のインタビューで自ら述べる Jewishness の定義には、かなり普遍性が強いようである。いわゆる Jewish American writer という分類についても Malamud は、特定のレッテルは作品の解釈を狭めると忌避している⁷⁾。そして彼の作品は、特定の背景を持つ人だけのために書かれたのではなく、あらゆる国籍人種の読者のものである事を重ねて強調する。American Jewish writer よりもただの American writer を、さらには世界文学の中の Malamud と称される事を望む気持は、同じユダヤ系の Bellow や Roth にも共通する心理らしく、

彼らはいずれもこの category に大なり小なり反発している⁸⁾。あらゆる民族、背景を超越した普遍的な真理を追求するのが作家の窮極の目的であるとすれば、彼らの反発は当然かもしれない。

1958年、Malamud が認められ始めた頃、インタビューで彼は「作家の目的は、文明がそれ自身を破壊するのを阻止することにある。(略)私の創作の目的はニヒニズムへの抵抗とヒューマニズムの擁護にある」⁹⁾と答えている。

1968年、著名な作家になった Malamud は、イスラエルを旅行した際「ユダヤ人の作家がアメリカで活躍するようになったのは、彼らが人間の価値に対して鋭い感受性を持っていたからである」また「私はユダヤ人の経験をあらゆる人間の悲劇的経験を象徴するものとして描く」と語った。この時に Malamud は後に様々な反応を招いた universal man としてのユダヤ人という彼の考えを明らかにしたのである。

“I handle the Jew as a symbol of the tragic experience of man existentially. I try to see the Jew as universal man. Every man is a Jew though he may not know it. The Jewish drama is a... symbol of the fight for existence in the highest possible human terms. Jewish history is God's gift of drama.”¹⁰⁾

上記の ‘Every man is a Jew though he may not know it.’ は、いろいろな批評家が引用して問題にした。Ben Siegel は、「多くの現代のアメリカ・ユダヤ系作家たちはユダヤ人の中にある人間性を探求しているのに対し、Malamud は全ての人間の中にあるユダヤ人を探し求めている¹¹⁾」と評したが、Malamud の特色を鋭く言い当てている。ユダヤ人の人物の人間性を追求することと、全ての人間が持っているユダヤ人的なものを追求することでは、大きな距たりがあると言えよう。

Malamud の姿勢は、疎外された少数派の一民族であるユダヤ人の深い苦悩を普遍性のレベルにまで高める事には成功している。それは、彼の文学がアメリカだけでなく、世界各国でも高く評価されつつある事実と無縁ではない。

ところが、以上述べた Malamud 文学の普遍性という長所に対して、Malamud のユダヤ性に関して、疑問を投げかける批評家もある。批判が同じユダヤ系の学者から出ている場合と、そうでない場合とでは多少、違うようだが、例えば *The Assisant* の中で Malamud はモリスの口を通して「ユダヤ人であ

るためには良き心を持っていればよい」と語らせているが、この定義は極端に融通が利きすぎると言う批評がある。¹²⁾ 実は、良い人間になるためには、ユダヤの律法を守らなければならないという但し書きが付いているのだが、その律法も「正しい行いをし、正直で善良であること」という、いわば万国共通の道徳である。Allen Guttman は、これでは Kant と同じであると言い、モリスのユダヤ人論についてはその必然性を疑っている。¹⁴⁾ たしかにモリスの律法の考え方は、律法を与えられた選民であるユダヤ人と、律法を持たない異邦人 (goim) の区別を無意味なものにしてしまう。

Guttman はまた、*The Last Mohican* のサスキンドを例証する。ユダヤ系難民としてローマで、あやし気な商売でその日暮しを続けているサスキンドは、イタリア政府の待遇をのろいながらも、建国されたイスラエルへ戻る切符はなぜか拒否する。しかも、ローマで偶然、知り合ったりフィデルマンには、同じユダヤ人としてサスキンドの不遇を救う責任があると主張するのである。この例から、Malamud の描くユダヤ人には、イスラエル人としてのナショナリズム¹⁵⁾ は欠くが、ユダヤ人としての同国民意識がある事を指摘している。

The Lady of the Lake についても全く同じ事が言える。Guttman の結論は、Malamud は登場人物が互いにユダヤ人という運命共同体の一員である点を強調する作家であり、peoplehood というものの信奉者なのだと言う。¹⁶⁾

The Assistant では異邦人のユダヤ教徒改宗というモチーフがあるが、Malamud はその意味を曖昧にした。というのは、彼はユダヤ人を単に「苦悩する人」と定義したとも解されるからである。実際、フランクの改宗のきっかけとなったモリスでさえ、葬式でのラビのユダヤ人モリス観と、娘の言葉はアイロニカルに対立するし、彼が正統のユダヤ教徒かどうかは曖昧だ。安息日に商売をし、シナゴグへは行かず、豚肉を食べるモリスは、外面的にはユダヤ教徒である証明を何一つ持っていない。モリスはユダヤ人としての自己のアイデンティティをあくまで内面の問題に帰着させている。

この点について Robert Alter は、次のように批評する。「Malamud はある抽象的な倫理観を特定のグループを代表する登場人物に結びつけようとする。しかし読者には両者の結びつきが独断的なものに、即ち現実と理想の芸術的混乱¹⁷⁾のように映る」

Malamud の内向性 (人間の内面性に主として視点を向ける傾向) に対しては、1961年に Philip Roth が、Malamud は社会性に欠けるという批判をしてい

¹⁸⁾る。Roth の指摘で Malamud が、いわゆるアメリカの the contemporary scene を他のユダヤ系作家とは異なる見方から取り上げる事が明らかにされた。しかし、それに対して Malamud は、1961年の *A New Life* で、大学という組織とアメリカ社会を、1966年の *The Fixer* では、ユダヤ人迫害を政治的な問題としても取り上げ、この批判に答えた。

しかし、1977年にオレゴン州立大学から出た Malamud 論の論文集の Leslie Field の論文は、Malamud のユダヤ性 (Jewishness)、特に彼の現代のユダヤ人問題に対する問題意識には、まだ marginality があるとしている。Leslie Field は、Malamud 研究に大きな貢献を果しているが、Malamud の Jewishness については、ハイフン付きのユダヤ系作家という判定を与えている。その見解では「Malamud は一部のユダヤ系アメリカ作家たち同様、“assimilationist tendencies” や “universal humanism” 運動の影響によって骨抜きにされている。それらの傾向や運動は、ユダヤ人の作家に個有のものである創作の秀れた特徴を破壊してしまう。いったい現代のユダヤ人にとって、最大の関心事は何であろうか。ナチの the Holocaust やイスラエル再建国こそ、現代のユダヤ人の思考と感情に、何らかの形で常に影響を与えている大事件だったのだ。これらは Malamud の小説の中心を占めているか。答えはノーである。¹⁹⁾」このように語る Field は、Malamud が1960年代から70年代の今、ユダヤ人が現実と直面している政治的歴史的状況に、創作の視点を向けない事を暗に批判していると思われる。

一方 Sheldon Norman Grebstein²⁰⁾ は Malamud の Jewishness の根拠を ①苦悩に意味を与えた事、②ユダヤ的ユーモアを使用した事、③ユダヤ的口語表現の活用に見ている。①については既述した如く、単に「苦悩する人間」としてユダヤ人を定義する事は、それが Malamud の重要なモチーフの一つであるにしても、Malamud の Jewishness の根拠にするには、抽象的すぎるという批判は免れまい。②については I の項で、Malamud の弁証法的な発想の方法として取り上げた。彼の弁証法的文体の特徴には、ユダヤ人的思考を感じさせるものがある。③に関しては、Malamud が技法としてイディッシュ口語のリズムを利用し、独特のニュアンスを出すのに成功した事は、多くの学者が指摘している。Malamud 文学は、イディッシュの民話的世界と、アメリカにおけるユダヤ人社会を合体させた、複合的性格に魅力があると言われる。²¹⁾ 東欧のユダヤ人社会が持つ重苦しく古風な雰囲気とアメリカの大都会の持つ近代性とは融け合って、

一種独特の味合いがある。

また Malamud にはイタリア物と称される一連の外国を舞台にした作品があるが、アメリカやロシアだけでなく、妻の出身地イタリアからも多くの題材を取り入れているのである。しかし中心にあるのはやはり、遠く殉教の歴史にまで逆上るユダヤ人全体の暗い過去であり、それに耐えてきた民族としての誇りである。

Malamud の描くユダヤ人の環境や生活は、1970年代の現在から見ると、時代錯誤ともみなされかねない、ひと昔前のユダヤ人の貧民窟であったりする。Malamud が極貧の *sophisticate* されていないユダヤ人庶民の素朴な姿ばかり描くために、彼は現在よりは過去のユダヤ人像に強い愛着を示していると言われる事がある。たしかに Malamud は、同胞のユダヤ人に対して古風な愛着を示す。Every man is a Jew. という発言の裏には同郷人への深い愛着がある。愛着が深いからこそ、民族の特有な風格を直感できるのである。Malamud のユダヤ性は観念的なものではなく、彼の才能が最もよく発揮されるのは、イディッシュ民話が持つような、民族の独特な性格を彼が直感的に捉える瞬間である。

The Assistant 以来、ずっとユダヤ人を多く登場させ、ユダヤ人としての過去、現在、未来に Malamud が深いこだわりを示している事実を思う時、彼のインタビューの発言を、字義通りに解釈して彼の Jewishness を疑うよりは、Malamud の精神に根強く生き続けている、民族の魂のようなものを知る方が Malamud を理解する近道のように思われる。彼の普遍化したユダヤ人論は、人種のるつぼと言われるアメリカで、国際化時代の今日、現に活躍中の作家の発言として解釈すれば、特定のレッテルを Malamud が忌避するのは、むしろ当然とも言えよう。その発言をもって、Malamud の Jewishness を否定してかかるのは早計である。

Guttmann の解釈「Malamud はユダヤ人を苦悩する人と定義した」²²⁾は少し自由すぎる解釈のようにも思えるが、Malamud に内的な存在としての人間という強いモチーフがある事は事実だ。アメリカの新教社会の倫理観とは少し違うヘブライ的な倫理観とでも言うべきもので、道徳的な存在としてのユダヤ人という、現代文学では特殊な概念を作品に強く押し出す。つまりユダヤ人を苦悩するだけでなく、道徳的向上心に富んだ人間として見る人間像である。その結果、ユダヤ人の経験する苦しみは Malamud の重要な創作の素材になる。その苦しみを耐え抜く、道徳的向上心の記録が作品の重要なプロットにもなりうる。Malamud には、従来のアメリカ文学には見られなかった、人間の内面性に対す

る繊細な感受性と新しい倫理観がある。彼の作品が持つ豊かな精神性はヨーロッパ文学の伝統を感じさせるが、ユダヤ系アメリカ人という複雑な背景を持つ登場人物たちを支配しているのは、窮極的には、やはり民族的な精神である。

The Assistant のモリスの倫理観が Kant のそれと同じだと言うが、一見似ているようで、ユダヤ人の倫理観はやはりヨーロッパのそれとは質的に違う。「待つ」という忍耐を例にしても、旧約の人々が語る、時間性を超越した永遠の「待つ」には遊牧民の持つ民族性が感じられる。おそらくモリスの「待つ」も、いわば常識を超えた、不条理の世界の尺度を基準にした「永遠の待つ」に違いない。モリスの人生観は、やはりきわめてユダヤ的である。

しかし同時に Malamud は、ユダヤ人の遍在性を強調することによって、全ての人間の中にユダヤ人を求め、ユダヤ人の経験する苦しみを全ての人間の苦しみに昇華する。

いずれにしても Malamud 文学の特質をあまり図式的にとる事、例えば *The Assistant* の結末のフランクの改宗を、カトリック思想とユダヤ思想の結合と考え、ユダヤ教とキリスト教という二大思想がここで合流したという風に解釈するのは、合理化のためにかえて作品の自由な解釈の幅を制限することにもなる。

先に挙げた Leslie Field の厳格な批評は、同じ民族的背景を持つ一部の読者の支持は受けそうである。しかし Malamud 文学のユダヤ的性格は、取り上げた題材よりも、その手法上に、よりユニークに表われている、と言うのが本稿の見解である。(I の項及び結論を参照)

Ⅲ. 神話と反神話

現代文学に素材として神話が使われるようになった理由は、T. S. Eliot の *The Waste Land* や James Joyce の *Ulysses* の例を挙げるまでもなく、現代人の経験する不安や世界の不条理性を表現するのに、様々な神話がこれまでになく作家の想像力を強く刺激したからに違いない。われわれは改めて、現代人の置かれている状況に潜む神話的性格というものに認識を新にした。

1. 外的神話

a. 「聖称」伝説

Malamud の作品にデビュー時から技法として神話が用いられてきた事は周

知の事である。そのグロテスクな寓話的性格のために、不当に看過され続けた処女作の *The Natural* は、最近では Malamud 研究の上で重要な原型として見直され始めている。Malamud には一作ごとに、今まで取り上げなかった新しい題材に挑戦する大胆な面があるが、この作は外見上はアメリカの野球史を題材にしながら、土台にはアーサー王伝説に連なる「聖杯」(The Holy Grail)の伝説がある。伝説の若い騎士 Percival にあたる主人公ロイ・ホブbs (Roy Hobbs)は聖杯を守っている王 (The Fisher King)の監督ポップ・フィッシャー (Pop Fisher)の率いる球団に入り、チームを最下位の *The Waste Land* の状態から、あとひと試合でペナント優勝という所まで導く。しかし彼はその後、自らの欲望のために神話の型通りに失脚し、退団を余儀なくされる。筋書は「聖杯」伝説のパターンを、また劇のリズムとしては、季節の循環 Seasonal Pattern 等の神話的類型が使われている。この作品の神話的要素を列挙すれば、聖杯探求のモチーフ、豊穣の神話や季節の循環のパターン、植物生長の儀式などがあり、登場する人物にも漁夫王、孤児のヒーロー、贖罪の山羊やキリスト教のシンボル、それに名前のシンボリズムなどがある。Pop Fisher という名前がすでに、彼の漁夫王であることを示している。

主人公の前任者にバンブ (Bump) という強打者がいたが、打球を追って、勢いの余りフェンスに追突する。この時の事故が原因で彼は急死するのだが、バンブは新しい王にとって代られる古い gods の一人であり、土地に豊穣をもたらす燔祭の犠牲である。しかし救世主のように現われた主人公自身も、最後は年若い敵側の投手に三振を打ちとられる。バンブの運命も、ロイのそれも、聖王殺しという供儀神話のサイクルに一致する。

ロイは Percival の魔法の剣に相当する手製のバットを持って打ちまくるのだが、このバット (Wonderboy) に当たったボールが砕けた時、空にはつんざくような音が響き、雨滴が飛び散る。そして物語の終りでロイが八百長試合の買収に応じた時、試合の最中に雷鳴が轟き、魔法のバットは真つ二つに割れてしまう。

先に寓話的な性格と言ったが、この作品は、Field たちとのインタビューで Malamud 自身が語っているように、神話をただ神話としてでなく、アメリカの生活の倫理的ジレンマを象徴するために用いているのである。

b. ヒロインの神話的機能

ロイの転落と再生に二人の女性に関係する。最初ロイはバンブの愛人だった

メモ (Memo) の虜になるが、彼女はロイの求愛に対し、買収に応ずる事を条件に承知する。メモが騎士を墮落させる魔女とすれば、不振に陥ったロイをスタンドから応援して、ホームランを打たせるアイリスは豊穡の女神である。

Malamud の作品では必ずと言ってよいほど、主人公の精神の変化に、そのきっかけを与える巫女の女性が登場する。アイリスの影響は、主人公の価値観の転換のきっかけになる。

Edwin M. Eigner の *The Loathly Ladies* ²⁵⁾ 説によると、Malamud の女神たちは、Chaucer や Gower それに Iceland や Scotland や Ireland の名も無い作家たちが描いた the Loathly Lady の類型に属するのだと言う。中世の伝説的女性である the Loathly Lady というのは、時には美しい育ちの良い娘として、時には醜く貧しい老婆として現われては、騎士を誘惑する女性である。そして最後は外観上の醜さを受けない限りは、彼女たちの真の美を獲得する事ができないという愛のテストを主人公に課す。物語の最後でロイの妻となるアイリスはたしかにこの the Loathly Lady の面を持っている。彼女は自分でも知らないうちにロイを自己の運命に引き寄せ、ロイは彼女と合体するためには、最初抱いていた野望や自由への計画を放棄せざるをえないようになる。

アイリスや *A New Life* のポーリンが the Loathly Lady だと言う事は、彼女たちの肉体的特徴にも現われている。この点は前述のアイロニーの所で触れたが、巫女的女性である彼女らには生産の能力が与えられているのである。ヒロインの女性的な能力が、子どもを生むという生殖力に於て強調されている事は *The Natural* や *A New Life* に明らかである。奇妙な事に Malamud の女性たちの乳房はたいてい欠点を持っている。平たい胸や小さい胸 (ポーリンとヘレン) の他に、病んだ乳房 (メモや *A New Life* のエイヴィス (Avis)) が登場する。言うまでもなく、乳房は生命の糧の倉であり、女性的なもののシンボルである。ヒロインの女性的なシンボルが、歪んだイメージを持つ事は、the Loathly Lady の定義に合致する。そして主人公はヒロインたちの胸の意外な貧しさに一度は失望するが、そのうちそれに耐えられるようになる。かくして Malamud の女性たちは、*The Faerie Queene* のように、主人公を知らないうちに crucial insight ²⁶⁾ へと導く。

Malamud のヒロインたちは、自身、美と醜の両面を持つ複合的な人物だが、一方、世界の醜惡な物も、美しい物も一切を受け入れて飲み込む、大地のような存在でもある。様々なアイロニーや、動機の高藤にもかかわらず、窮極的にはヒロインが、主人公の精神的変身の指導的役割を持つ事を考えると、ヒロインの

生殖力は、いわばユーモアとは別の意味で、アイロニーの解決法として、象徴的な役割を演じている事になる。

c. *The Natural* と他の作品の関係

ただ *The Natural* は特に神話的性格が強く、Sandy Cohen²⁷⁾ も言うように、女神たちはあまりに機械的に、主人公にある物を与え、また奪うように見える。その結果、今までに二度しか sex の経験を持たないアイリスは二度とも妊娠する。主人公の償いと再生も、人格的発達から必然的に導き出されるというよりは、神話のダイナミズムが生み出した結果にすぎない。

この作品は工夫に凝りすぎた（球界のスキャンダルやエピソードは、主なものだけでも、選手の射殺事件、球団買収、Babe Ruthの話など多種多彩だ）きらいがあり、あまりに神話に頼ったため、人物が機能化されすぎた。*The Assistant* 以後の作品に於ける主人公の苦悩の深さと比べてみると、この事はよりはっきりしてくる。

しかし *The Natural* は Malamud の個性がユニークであり、資質が幅の広いものであることを知る上では重要な作品である。とにかく、この作品は、「聖杯伝説」を縦糸とし、野球史のエピソードを横糸として、両者が織り合わさる事によって、サイケデリックな華麗さと同時に、グロテスクな怪奇さをも秘めた、風変りな世界を作り上げている。

The Natural の神話的構造は、原型として、以後の作品でも多かれ少なかれ踏襲されている。*The Assistant* は、*The Natural* ほど顕著ではないが、モリスとフランクの関係は漁夫王のパターンの変形が見られる。もっともこの作品は旧約聖書のヤコブ・ラバン・ラケルの物語としても解釈できる。²⁸⁾ 息子の父親探求ならびに継承のパターンは、短篇の *The First Seven Years* でも使われる Malamud の重要なモチーフの一つだ。ヘレンは言うまでもなく *The Loathly Lady* で、フランクに、長く辛い愛の試練を与える。

A New Life にも古き王（ギリ）と新王（レヴィン）の葛藤がある。古き王に代って妻（ポーリン）と結ばれるレヴィンは、同時に、父親の役も引き受ける訳である。

The Fixer では、孤独な主人公に対する副主人公が登場しないが、主人公自身が不条理な運命に捧げられる贖罪の羊である。主人公のヤーコフ・ボク（Yokov Bok）の Bok はドイツ語で山羊を意味し、彼が燔祭の犠牲の羊である事を象徴している。妻のレイスル（Raisl）は Israel の anagram である。²⁹⁾

このように Malamud には神話に対する本能的な想像力があり、登場人物や状況に宗教・儀式的な意味を与える事が多い³⁰⁾。しかもそこに不自然さが感じられないのは、彼の多方面にわたる豊かな才能のゆえである。Malamud の技法には、イディッシュ文学の要素もあるし、チェホフの影響³¹⁾、弁証法的構造を持つ文体、また簡潔な描写は卓抜であると評されるが、伝統的なリアリズムを駆使しているかと思うと、シニョールリアリズムが出てくるという訳で、その個性を単純に割り切る事はむずかしい。

2. 内的神話

さて、以上に述べた既成の神話の枠にはめて物語が構成されている場合、その神話を外的神話と名付けるなら、主人公の内面に起る変化はいわば、内的神話である。この場合、内的神話は結局、神話の逆転であり、反神話の性格を持つ。それは、アメリカ文学に様々なヴァリエーションで登場した the American Dream という神話の逆転でもある。

The Natural も *The Assistant* も、主人公には、いわゆる Schlemiel³²⁾ 的性格があるが、それと同時に、強い向上の意欲が見られる。物語を進行させる原動力は、彼らのアメリカン・ドリーム的願望に他ならない。この、きわめてアメリカ的な（新しい国には夢の実現の可能性はそれだけ多いから）発想は、他のあらゆる要素（中世の物語が持つ神話的意味）より、はるかに決定的な動機となる。ロイもフランクも *A New Life* のインテリのレヴィンさえも、最初はこのアメリカン・ドリームという神話にとりつかれている。

しかし最初の動機が、やがて人間としての内的充実への希求に変質する過程が Malamud の長編のメイン・テーマであり、常に問題の中心である。

外的神話でふれた、古い植物が死んで、新しい生命を宿した種が残され、やがてその種も土の中で新しい植物に変身する「植物生長のサイクル」に見られる、古い生命の死と新しい生命の誕生の繰り返しは、Malamud の主人公の内面の変化を示すパターンでもある。

The Natural では、アイリスとデートをした湖の場面でロイは、十五年前の彼に起きた不可解な事件を話す。その出来事が起らなかったら、今頃彼は野球史上最高の記録保持者になっているのに、なぜ自分の一生はいつも、スタート直前にチャンスを逸する事の繰り返しなのだろう、と彼は過去の懊悩を打ち開ける。それに対してアイリスは、経験の意義について、特に苦悩の倫理的意義について彼に説くが、ロイは過去の辛い経験から得たものは、ただ苦しみだ

けだと言って理解しない。しかし名誉や栄光に捕われていたロイも、やがてアイリスの言う倫理的な意味での真の英雄の役割に目ざめ、最後は野球界からは失墜するが、アイリスとともに新しく出発する。

この転落から浄化へのプロセスは Milton の *The Paradise Lost* のテーマの変型とも受けとられる。古い価値観に代って、真の自由と尊厳を人間に与える新しい価値観が主人公の内面に形成される過程である。この成長過程は *The Assistant* では、より重厚に描かれる。

ロイ同様、孤児であったフランクは、初めは落ちぶれた現状から、自由気ままな境遇へ脱け出すには、犯罪を犯して運勢を変えようとするほど、倫理観が退廃していたが、善良さを絵に書いたようなユダヤ人モリスと暮すうちに、自己を犠牲にしてまで、モリス一家を助けようとする人間に変身していく。環境は、最初から最後まで、極貧のモリスの狭い食料品店内の日常生活でありながら、フランク自身の内部では大きな変化が起こる。しかも感動的なのは、その変化がフランク自身にはもちろん、動機となるヘレンにさえ、ほとんど見えないような形で行われる点である。Malamudはこの作品では、あらゆる注意を払ってセンチメンタルにならぬよう、自己を制御しているため、見事な内面のドラマが読む者にリアスティックに伝わってくる。

A New Life の構成は複雑だが、大学講師のレヴィンが、赴任した先の大学の改革に乗り出すが、旧い習慣と大学人の自己保身の精神のために、状況は旧態依然として動かず、努力は実を結ばない。そのうち過去に首になったダフィ(Duffy)という進歩的な教師の退職のいきさつを調べていくうち、レヴィンははっきりと、ダフィと同じ立場に立っている自己を認識する。結局、自説を曲げないレヴィンは、漁夫王伝説の型通り、大学から追放される。最後に女と子供を引き受けるというのは *The Natural* と同じパターンである。ここでも大学での地位や名誉への希望は、最後の倫理的決断に譲歩せざるをえない羽目に陥る。しかしレヴィンにとっては、それが皮肉にも新生のきっかけのように思えてくる。

第四作の *The Fixer* では、キリスト教の少年殺害の嫌疑で投獄されたユダヤ人ヤーコフは、初めは政治や民族の歴史に無関心であり、冷酷な運命も、個人の不幸としてしか受け取れなかったが、後半では自己の運命を同胞のユダヤ民族のそれと結びつけ、あらゆる懐柔策にも屈せず、最後は同胞全体のために裁判に出頭して闘う決意をする。

このように、いずれの長編でも主人公の内面では価値観の大きい転換が起り

古い価値が棄てられ(あるいは棄てさせられ)新しい価値がそれにとって変る。その転換こそが、主人公が陥った、どうにもならないジレンマから主人公を救う突破口となるのだ。新約聖書の「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにあらん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」³⁴⁾の意味する死と生のパラドックスが主人公の自己変革の意味なのである。

IV. 結 論

Malamud の愛読者にとって、他のどの作家にも見られぬ Malamud の独特な雰囲気や秘密を探る事は、興味をそそられる問題である。ところが最もユダヤ的とされる Malamud が、現実のユダヤ人の問題については寡黙であり、作中人物も、あたかも無国籍の過去の民族の人間として描いているという一部の批評がある事や、インタヴューで Malamud 自身、ユダヤ人を普遍化して述べている事などから、Malamud のユダヤ的性格について改めて考える必要を感じた。そもそも、ユダヤ人の定義そのものがきわめて難しい問題である。

II 項では、これまですでに指摘された Malamud のユダヤ人としての複雑な状況を整理してみたが、民族的性格は Malamud 文学の特徴をも決定しているというのが、I, II をまとめた上での結論である。

イザヤ・ベンダサン(著者は誰であれ)の「日本人とユダヤ人」³⁵⁾には旧約聖書の「ミカ書」の事が出てくるが、一つの規定に矛盾する今一つの規定を想定するという思考法は、古くからあるユダヤ的発想法なのかもしれない。ともかく Malamud の人間像にはユダヤ的な弁証法がつよく影響していると思われる。そういう民族的な性格は、いわば理屈をこえて、Malamud の資質の中に染みついているものに違いない。だからユダヤ人としての民族的特徴をふまえて Malamud を研究していけば、社会学的な立場からも新たな光を投ずることによって、Malamud 文学に今まで以上に、広い視野が与えられるであろう。

しかし本稿では、主として文学手法上の立場から、即ち文体やストーリーの構造を通して Malamud 文学の本質を追求した。もちろん Malamud には、神話の利用の問題や異国趣味などがあるから、ユーモアだけが彼の代表的な特徴ではありえない。しかしやはり、彼の喜劇的なヴィジョンに問題の核心がある事は間違いなさそうだ。

Malamud は視点の対立を超えて、全体を捉える弁証法的な構造を持つ文学

を目ざしている。チェホフ的と言われる理由もそこにある。これは時には、³⁶⁾
Radical Innocence の著者 Ihab Hassan のように、作家のヴィジョンの二重性
 が作品の葛藤を和らげ、穏やかなものにさせているという批評をも生む。
 Hassan は「Malamud のヴィジョンにはアンビヴァレンスがある。その両面性
 が小説の肯定的な力を弱めるし、また時には低下さ³⁷⁾えさせる」と言う。

しかし Malamud の作品にどれほどアイロニーがあろうと、そこには対立が
 生む虚無的な冷たい曖昧さが支配しているのではない。むしろ、あたたかいユー
 モアが全体を調和させる中に、はっきりとした前向きの方が浮かび上って
 くる。Malamud の世界は、どんなに不合理で悲惨な状況に見えようと、最後
 には絶望よりは希望が生き残る世界である。希望を生み出す Malamud のユー
 モアの特有な意味については I で、また希望の根拠については、III の内的神話
 の所で触れた。

(1978. 9. 27)

註

- 1) Leslie and Joyce Field (ed.), *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays* (Prentice-Hall, Inc., 1975), p. 16.
- 2) Bernard Malamud, *The Magic Barrel* (Farrar, Straus & Giroux, 1975), p. 191
 テキストは全て、F, S & G 版を使用した。
- 3) Ihab Hassan, *Radical Innocence* (Princeton University Press, 1961), p. 167.
- 4) *The Assistant*, p. 230.
- 5) Leslie A. Fiedler, *No! In Thunder*, (Stein and Day, 1972), pp. 110-111.
- 6) この項の滑稽とユーモアの概念については、『植名麟三全集第15巻』(冬樹社, 1974)
 の「創造とユーモア」(pp. 109-130)を、文体の弁証法については第20巻(1977)の
 「キリスト教における文学の理念」(pp. 313-322)を参考にした。
- 7) Leslie & Joyce Field (ed.), *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays*, p. 12.
- 8) *Ibid.*, p. 11.
- 9) *Ibid.*, p. 7.
- 10) *Ibid.*, p. 7.
- 11) Ben Siegel, "Victims in Motion: Bernard Malamud's Sad and Bitter Clowns,"
 in Leslie & Joyce Field (ed.) *Bernard Malamud and the Critics* (New York
 University Press, 1970), p. 125.
- 12) Sandy Cohen, *Bernard Malamud and the Trial by Love* (Rodopi N. V.,
 Amsterdam, 1974), pp. 38-39.
- 13) *The Assistant*, p. 124.
- 14) Allen Guttman, *The Jewish Writer in America: Assimilation and the Crisis
 of Identity*, (New York: Oxford University Press, 1971), p. 118.
- 15) *Ibid.*, p. 114.

- 16) *Ibid.*, p. 120.
- 17) Robert Alter, "Malamud as Jewish Writer," *Commentary* 42 (September 1966), p. 71
- 18) Philip Roth, "Writing American Fiction," in Marcus Klein (ed.) *The American Novel Since World War II*, (Fawcett Publications, Inc., 1969), p. 151.
- 19) Leslie Field, "Bernard Malamud and the Marginal Jew," in Richard Astro & Jackson J. Benson (ed.) *The Fiction of Bernard Malamud*, (Oregon State University Press, 1977), pp. 97-116.
- 20) Sheldon Norman Grebstein, "Bernard Malamud and the Jewish Movement" in Leslie & Joyce Field (ed.), *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays*, pp. 18-44.
- 21) Earl H. Rovit, "The Jewish Literary Tradition", in Leslie & Joyce Field (ed.), *Bernard Malamud and the Critics*, pp. 3-10.
- 22) Allen Guttman, *The Jewish Writer in America*, p. 116.
- 23) Leslie & Joyce Field, (ed.), *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays*, p. 5.
- 24) *Ibid.*, p. 9.
- 25) Edwin M. Eigner, "The Loathly Ladies," in Leslie & Joyce Field (ed.), *Bernard Malamud and the Critics*, pp. 85-108.
- 26) *Ibid.*, p. 91.
- 27) Sandy Cohen, *Bernard Malamud and the Trial by Love*, p. 29.
- 28) 旧約聖書『創世記』29章
- 29) Sandy Cohen, *Bernard Malamud and the Trial by Love*, p. 74.
- 30) Charles Alva Hoyt, "Bernard Malamud and the New Romanticism", in Harry T. Moore (ed.), *Contemporary American Novelists* (Feffer & Simons, Inc., 1964), p. 68.
- 31) Gransville Hicks, "Generations of the Fifties: Malamud, Gold and Updike", in N. Balakian & C. Simmons(ed.), *The Creative Present* (Gordian Press, 1973), p. 222.
- 32) Sanford Pinsker, *The Schlemiel as Metaphor*, (Feffer & Simons, Inc., 1972) p. 9, pp. 87-124.
- 33) Ihab Hassan, *Contemporary American Literature 1945-1972*, (Frederick Ungar Publishing Co., 1976), p. 40.
- 34) 新約聖書『ヨハネ伝』12章24節
- 35) イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』山本書店, 1974, pp. 75-85.
- 36) Walter Allen, *Tradition and Dream*, (J. M. Dent & Sons Ltd, 1964), p. 330.
- 37) Ihab Hassan, *Radical Innocence*, p. 162.